Cruises Historia

ゆたか倶楽部 よもやま話 vol.10

クルーズご意見番〝初代クルーズマスター 松浦睦夫〟が語る

２００１年、「飛鳥」「にっぽん丸」「ぱしふいっく びいなす」の日本船３隻がそろって世界一周クルーズを実施しました。「ぱしふいっく びいなす」は１９９８年就航と3隻の中でも一番新しく、初めての世界一周クルーズということや、事前に「訪れたい場所」や「クルーズ中に楽しみたいこと」などを一般募集し、その意見をふんだんに取り入れたコースということもあり、大好評でした。

２回目か3回目かの世界一周クルーズの時ですが、60代後半の女性のお客様がエジプトで亡くなりました。死因は脳溢血です。ご遺体はエジプトで防腐・防疫処置され、日本に搬送されることになりました。私が驚いたのはその処置の方法で、まるで古代エジプト王のミイラのように全身を包帯でグルグルと巻くのです。日本到着後、専門業者の元で包帯を解き、湯灌してお体を洗い清められました。ご遺族の強い希望により本船の専務が弔事を読み、私も葬儀に出席させていただきました。会場にはクルーズの写真が無数に飾られていたのがとても印象に残っています。世界一周クルーズは、本当は夫婦で参加する予定のところ、出発前にご主人が亡くなられたため、お一人で参加されたそうです。

葬儀後しばらくして「母が乗船した際に宿泊した部屋に泊まりたい」とご遺族からご相談があり、後日娘さんとお孫さんが遺影を持って乗船し、私がクルーズのお世話をさせていただきました。その時に伺ったお話ですが、お母様である故人が旅行前に「客死って知っている？」と聞いてきたそうです。娘さんが「知らない」と答えると、「旅行中に亡くなることよ。それはすごく幸せなことなのよ。」とおっしゃったそうです。この場を借り、改めてご冥福をお祈りいたします。

◇

世界一周クルーズといえば、日本で一番実施回数が多いのはピースボートです。当時、早稲田大学の学生だった辻元清美氏（現・衆議院議員）他数名が、国際交流を目的として１９８３年に設立したＮＰＯ団体で、設立当初アジアをめぐるクルーズを実施していました。１９９０年に日本の団体として戦後初の世界一周クルーズを実現以降は、世界各地をめぐる「地球一周の船旅」を企画。現在は年３回のペースで数を重ねています。

第１回世界一周クルーズでこんなことがありました。グラスワインを毎日１杯無料サービスという話だったのに有料だと言われたと、お客様が集まってクレームを出したそうです。パンフレットの校正ミスだったのですが、出港後、お客様が集まった時「皆でワインを作りましょう」と提案があり、製造方法を考える人、寄港地で瓶・ブドウを買いに行く人などの参加者を募りました。そして参加者の皆でブドウを潰して瓶に詰め、しばらくして自家製ワインが完成し、飲むことができました。利用する船が古いのでトラブルも多々あるのですが、そんな時も、事情をすべてお客様に明らかにして一緒に考え、希望に添えるように皆で力を合わせていきます。ケープタウンで足止めとなり20日間も出港できなくなった時は、お客様の意向や意見を集め、帰国するチーム、船の修理後参加するチームなどに分かれたそうです。トラブルもイベントにして、思い起こせば面白い経験をしたね、ということにしてしまうのが、旅行会社では出来ないＮＰＯの強みであり、驚かされます。

◇

旅行には気象による予定変更がつきものですが、クルーズはさらに海象も加わります。今年3月のことですが、私が添乗した、ゆたか倶楽部オリジナルツアー「八丈島と青ヶ島」で、こんなことがありました。東京竹芝から八丈島までは「橘丸（５６８１トン）」、そして八丈島から青ヶ島へは貨客船「あおがしま丸（４６０トン）」で渡ります。青ヶ島は伊豆諸島の有人島で最南にあり、米国の環境保護ＮＰＯが発表した「死ぬまでに見るべき世界の絶景13」に日本で唯一選ばれたことから人気が加熱しました。二重カルデラの特徴的な地形、夜の星空が魅力です。八丈島観光の翌朝、天候が悪い中、青ヶ島へ渡航しました。船の年間就航率５～６割ですが無事到着。素晴らしい景色を堪能した翌朝のこと、船の欠航と貨物船ならではの事情が重なり、当初１泊２日だったはずの青ヶ島滞在が４泊５日となり、最終的にツアー４日間の予定が倍の８日間になってしまいました。参加者の皆様には大変喜んでいただきましたが、初回でのこの経験を生かし、次回からは出発日時とコース内容を吟味して、実施したいと思います。

日本のクルーズ略史（日本の世界一周クルーズ）

１９９０年	ピースボートが日本の団体として戦後初世界一周クルーズ「地球一周の船旅」を実施
１９９６年	「飛鳥」世界一周クルーズを実施
１９９８年	「にっぽん丸」世界一周クルーズを実施
２００１年	「ぱしふいっく びいなす」世界一周クルーズを実施